世界名作劇場

小公女セーラ

（プリンセス）

『ロッティの冒険』

第16話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　椋露地桂子

登場キャラクター（第十六話「ロッテイの冒険」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ピーター
ベッキー
ロッテイ
ラビニア
ペネラビ
スーザン
ジェイン

モリー

ジェームス

シーザー（猫）

1

ミンチン女学院・全景（朝）

授業開始の鐘がなっている。

2

同・廊下（朝）

鐘をならしてくるアメリア。

アメリア「授業が始まります、皆さん、教室へ集まって下さい！」

各部屋から女生徒たちがとびだしてくる。

3

同・地下の台所（朝）

働くモリー、ジェームス、ベッキー、そしてセーラ。

アメリアのならす鐘の音が、聞こえる。

ベッキーと共に皿を洗うセーラの手がふと止まって、

セーラのＭ「授業が始まるんだわ……」
　そんなセーラを、モリーの声が、せわしなく追いたてる。
モリー「何をモタモタやってるんだい、今のうちに、生徒さんたちの部屋の掃除にかからなきゃダメじゃないか」
セーラ「は、はい……」
ベッキー「はい」
　仕事を急ぐ。
　スーザン、ジェイン、ペネラビ、ロッティたちの騒々しい声がかぶってくる。
「私のくつ下がない！」
「ボタンかけて！」
「本がどっか行っちゃったよゥ」
「私のペン返して！」

4

同・ロッテイたちの部屋（朝）

まさに戦場である。
ロッテイ、スーザン、ペネラピ、ジェインの幼い四人
が、出かける準備に右往左往。
ロッテイ「ない、ない！ 私の本がない！」
ベッドの下まではいずり回って捜しているが、
ロッテイ「あった！」
目についた本に手を伸ばす。
ジェイン「私のよ！」
反対からとびつき、とりあいになる。
「私の！」
「私のだってば！」
もめているところへ、
「何してるの！ 早くしなさい！」

どなりつけながら、ラビニアがとびこんでくる。
ラビニア「授業が始まっちゃうじゃないの、いつまでグズグズしてるのよ！」
ペネラビ、スーザン、部屋をとびだしていく。
ジェインも、あっという間に、ロッテイから本をうばいとって、部屋をとびだしていく。
ロッテイ「（あっとなり）私の本……」
言いかけた顔が、早くもくずれる。
ロッテイ「ああん……私の本をジェインがもってっちゃったよう……」

5 近くの廊下（朝）

掃除道具をもったセーラとベッキーがくる。
ワァワァ言う泣き声が、ここまできこえる。

思わず顔見合せるセーラとベッキー。

ベッキー「もしかしてあの声は……」

セーラ「（思わず）ロッテイ?!」

6 同・ロッテイの部屋（朝）

いそぎくるセーラとベッキー。

半開きになったドアから中をのぞいて呆然。

×　×　×

中では、泣くロッテイを叱りつけながら、ラビニアがそこいら中をひっくり返して本を捜している。

ロッテイ「私の本がないよう……」

ラビニア「泣いてばかりいないで、捜しなさい！」

ロッテイ「だってジェインがもってっちゃったんだもん」

ラビニア「嘘おっしゃい！　あんたがだらしないからこういうこと

になるのよ！」

× × ×

セーラ、思わずベッキーと顔見合わせる。

セーラ「本がないんだわ……」

次の瞬間、部屋へとびこもうとする。

だが、それを押えたのはベッキーだ。

セーラ「(?!……となり) だって、捜してあげなきゃ……」

そんなセーラに、いつになく厳しく首をふるベッキー。

ベッキー「(も、つらいが) 私たちが口を出すと、もっと面倒なことになってしまうわ」

セーラ「でも……」

× × ×

ドアの外でもめている二人に、ロッテイが気がつく。

ロッテイ「(思わず) セーラママ?!」

次の瞬間、ラビニアつきとばして、

×　　×　　×

セーラの胸にとびこんでくるロッテイ。

「ロッテイ！」

追ってくるラビニア。

ラビニア「先生に言いつけてもいいの！　おしおきをうけてもいいの！」

そのしかり声に、ロッテイ、一層おびえて、ますますセーラにしがみつく。

ロッテイ「セーラママ、助けて！　私を助けて！」

セーラ――。

ロッテイを抱きとめたまま、どうしていいかわからない。

セーラ「ロッテイ……あの……」

突然、厳しい声がふってくる。

「そんなところで何をしてるんです！」

ぎくっとふり返るセーラ。
いつの間にきたのか、ミンチンがメガネを光らせ、厳しい顔でたっている。
氷ついたセーラとロッテイ。
ラビニアもあわてて、

ラビニア「ロッテイが本をなくして……」

言い訳しかかるが、

ミンチン「（ピシリ）ロッテイの面倒を見るのは、代表生徒であるあなたの責任でしょう」

ラビニア「……」

ミンチン「準備は、前もってやらせておくべきです」

ラビニア「はい……」

ミンチン「わかったら、早くロッテイをつれていきなさい」

ラビニア「はい……」

口惜しそうに口びるかんで、ロッテイの手をひいて行

く。

呆然と見送るセーラとベッキー。

そんな二人に、ミンチン、厳しく言う。

ミンチン「ベッキーは、早く仕事にかかりなさい」

ベッキー「はい」

ミンチン「セーラは、私の部屋へくるように」

セーラ「はい……」

7

同・院長室

ミンチンにつづいて入ってくるセーラ。

——間——。

やがて、くるっとふり返るミンチン。

ミンチン「（じろり）何故呼ばれたか、わかってるんでしょうね？」

セーラ「……」

ミンチン「セーラ！」
セーラ「（思わず）私は、何も……」
言いかけるが、
ミンチン「（厳しく）生徒たちに近ずくことは許しません！」
セーラ「……」
ミンチン「昔はともかく、今のあなたは身なし子なんですよ。本来ならばボロをまとって、人様にものごいしなければならない身の上なんです。それが着るものも、食べるものも、住む部屋さえ与えてもらっているのは誰れのおかげだと思ってるの。それなのに、私の生徒たちに口出しするなど、身のほど知らずにもほどがあります」

8

同・外

きいているアメリア。

やがて、気配にあわてて身をひく。
ドアあいて、セーラが出てくる。
悄然と去っていくセーラを、気の毒そうに見送っているアメリア。
中へ――。

9

同・中

――入ってくるアメリア。
すでに仕事にかかっているミンチン。
アメリア「(見つめて)……」
ミンチン「(気ずいて)何です?」
アメリア「あの……(思い切って)少し厳しすぎるんではありませんか?」
ミンチン「何が?」

アメリア「セーラさん……あれほどの境遇の変化にもじっと耐えて、良くやってるようですわ。こないだも、始めておつかいに行って、しっかりした買いものをしてきたってモリーとジェームスが……」

ミンチン「アメリア」

アメリア「はい？」

ミンチン「余計な情をかけることは、あの子のためになりません」

アメリア「でも、お姉さま……」

ミンチン「あの子は、生涯身なし子として生きていく運命を背負ったんです」

アメリア「ええ、ですから、せめて私たちだけでも何とか……」

ミンチン「（ピシリ）うらむなら、あの子にぜいたく三昧をさせたあげく、事業に失敗して、私たちにまで借金を残して死んだ父親をうらむべきです」

アメリア「……」

それ以上は、何も言えない。

10 同・ロッテイたちの部屋

掃除をするセーラ。
ロッテイのもちもののひとつひとつを精一杯の気持で
揃えてやり、

セーラ「ごめんね、ロッテイ……今の私には、あなたがどんなに困
っても、助けてあげることも出来ないのよ……ただ、遠く
から見守っていることしか……」

涙があふれてくる。
ロッテイの声がかぶる。
「ねえ、どうしてセーラママと口きいちゃいけないの
？　どうしてセーラママは前のように、私たちと一緒
にお勉強しないで、あんな汚ない服きて、お掃除なん

かしてるの?」

11 同・教室

休み時間を、それぞれ本を読んだり、おしゃべりをしたりして過している女生徒たち。
その一隅で、ロッテイに追いすがられて、しどろもどろになっているアーメンガード。

アーメンガード「どうして、どうしてって、そんなことききかれても……」

ロッテイ「だって、アーメンガードは、セーラママと一番の仲良しじゃない?」

アーメンガード「え、ええ……それはそうだけど……」

ロッテイ「ねえ、セーラママは、どうして、何も言ってくれなくなっちゃったの?」

「言ってくれないんじゃなくて、言えなくなったのよ」
面白そうに割りこんできたのは、ガートルードとジェシーだ。
ロッテイ「（けげんに）どうして？」
ジェシー「一文なしになったからよ」
ロッテイ「一文なしって？」
ガートルード「ばかねえ、お金がないことじゃないの」
ジェシー「だから、セーラは、もう私たちとは違うの。勉強することだってもう出来ないし、住んでるところも汚ない屋根裏部屋なのよ」
ガートルード「それに、一日中台所で私たちの食べた食器を洗ったり、私たちのお部屋の掃除をしたり……」
ラビニアきて、
ラビニア「およしなさいよ」
ガートルード「だって、ロッテイがききたがるんですもの」

ラビニア「（冷笑で）そんな子に何を話してもムダよ、何にもわかりやしないんだから……」
ツンとしていく。
ロッティ「（プーとふくれて）……」

12 同・台所

働いているベッキー、モリー、ジェームス。
銀の燭台などみがいていたジェームス、何気なく入り口の方みて、?……となる。
小さな頭が、チラチラ見えがくれしているのだ。
ジェームス「（けげんに）……」
立ってきてびっくり。
ロッティが、コソコソ、ドアのかげから中をのぞきこんでいるのだ。

ジェームス「あんたは？」

モリーもベッキーも、その声におどろいてくる。

ロッテイ、見つかってしょぼんとなるが、思い切って、

ロッテイ「セーラママは？」

ジェームス「セーラママ？」

モリー「（訳知りに）セーラだよ、メイドのセーラだよ」

ジェームス「ああ……で、何の用です？」

ロッテイ「（精一杯大人びて）お話がしたいの」

ジェームスとモリー、何となく訳知りに頷き合う。

ベッキー、あわてて、

ベッキー「セーラさんは、今、市場へおつかいに行ってるのよ」

ロッテイ「いないの？　いつ帰ってくるの？」

すでにベソかきそうになっている。

ジェームスとモリー、そんなロッテイをつれなく追いたてる。

モリー「さあさあ、ここは生徒さんのくるところじゃありませんよ」
ジェームス「院長先生に見つかったらおしおきですよ」
モリー「さあさあ、モリーがお送りしてさしあげましょうね」
追いたてる。
ロッテイ「セーラママ、セーラママ！」
引きずられていく。
ベッキー「ロッテイちゃん……」
ジェームスの手前、なすすべもなく見送ってしまう。

13 市場

「ピーター！　これ頼んだよ！　いそいで届けておくれ！」
花屋の主人に呼ばれて、届けものの花束を受けとっているピーター。

ピーター「ハイヨ！」
　かけ声も元気に、店とび出そうとして、あっとなる。
　ヤマのような買物を抱えたセーラが、汗を流してくるのが見えたのだ。
ピーター「（とたんに）お嬢さま！」
　セーラのところへすっとんでいく。
ピーター「お嬢さま！　お手伝いします！」
セーラ「ピーターじゃない、今日は花屋さんのお手伝いなの？」
ピーター「ええ（と、自分の手の花みて）ちょうどいいや、はい、これ！」
　花束から、ちゃっかり花を一本抜いて、セーラに。
　そしてその間にもどんどんセーラの荷物をとりあげていく。
セーラ「ちょっとピーター……」
ピーター「大丈夫ですよ、お嬢さま！」

セーラ「ありがとう……それより……」
ピーター「ええ」
セーラ「お約束どうしたの？」
ピーター「お約束？」
セーラ「ええ……私のことセーラって呼ぶってこないだお約束したでしょ？」
ピーター「あ……」
セーラ「それに、助けてくれるのは嬉しいけど、あなたにだって仕事があるんだし……」
ピーター「なあに、こんなおつかいいつでも……」
とたんに、店の主人の大声がとぶ。
「ピーター！　早くいかんか！」
ピーター「（思わず、首すくめて）――」
セーラ「ピーターったら……」
ため息ついてしまう。

14 ミンチン女学院・前

ヤマのような荷物を抱えてもどってくるセーラ。

15 同・教室

絵をかいていたロッテイ、そのセーラの姿を見る。

ロッテイ「(パッと目を輝して) セーラママだ……」

思わず立ち上る。

とたんに、ミンチンのヒステリックな声がとぶ。

「ロッテイ!!」

ロッテイ「(泣きそうになって) ……」

目の前の絵をぐちゃぐちゃにつぶしてしまう。

ミンチン「(仰天) ——」

—— C・M ——

16	夢
	咲き乱れる花畑の中で、セーラと遊ぶロッテイ。 幸せ一杯である。
17	一転して暗い森の中
	いつの間にかセーラを見失なったロッテイが泣きながら捜してくる。 ロッテイ「セーラママ、セーラママ……」 そんなロッテイに、林立する木々が化けもののように襲ってくる。 「キャア!!」
18	と、とび起きたロッテイ

深夜のロッテイの部屋である。

ロッテイ「誰れか……」

言いかけて、夢だということに気ずく。

ほっとしたとたん、風がガタガタと窓をならす。

月光の中でおびえるロッテイ、

ロッテイ「（思わず）セーラママ……」

19

同・屋根裏部屋（深夜）

小さくなったローソクの火の下で、本を読んでいるセーラ。

風がガタガタと窓をならす。

思わず身ぶるいして毛布をひきよせるセーラ。

本を閉じ、ローソクの火をふき消そうとして、ふと、気配に耳をすます。

ガサ、ゴソ……という音。

セーラ「?……」

そっと音のする方を見る。

ネズミだ。

用心深そうな目で、こっちを見ている。

思わずおびえるセーラ。

咄嗟に

セーラ「シッ!」

と、追い払おうとする。

ネズミ、反射的に、穴の方へ逃げようとするが、又くるっとセーラの方を見る。

その目に狂暴さはない。

セーラ「……」

少しづつ気持が落ちついてくる。

セーラ「(そっと問いかける)何か私に御用?」

じっとセーラを見ているネズミ。
セーラ、少し大胆になってくる。
セーラ「私はひとりよ。あなたに何も危害は加えないわ、だからあなたも……」
そっと手を差しのべる。
とたんに、ネズミ、パッと穴の中に逃げていく。
セーラ「(がっかりして)……」

20 ロッテイの部屋(深夜)

ふるえる手でぎこちなくローソクに火をつけているロッテイ。
ううん……誰れかが寝返りをうつ。
ロッテイ「(ギクッと見て)――」
ペネラビたちの寝息を伺う。

大丈夫らしいことを確めて、そろそろ部屋を出ようと行きかけ、ふと気ずいて、あわてて自分の持ち物のところにもどる。
菓子箱から、ビスケットをつかみ出すと、寝巻のポケットに押しこむ。

21

同・外（深夜）

ローソクを手に、そっと出てくるロッテイ。
用心深くドアを閉める。
いざ――。
目の前につづく、シンと静まった不気味な廊下に身がすくみそうになりながらも、勇気をふるい起こして歩きだすロッテイ。

22

三階への階段口（夜）

――をのぼっていくロッテイ。

上ってきて、ぎくっとなる。

ミンチンの部屋の前で、シーザーがのっそりとこちらを見ているのだ。

ロッテイ「――――」

足がすくむ。

が、自分で自分を勇気ずけるように、

ロッテイ「もう少しよ……もう少しでセーラママのところへ行けるんだから……」

うさんくさげに見るシーザーから、なるべく離れるようにして、そっとミンチンの部屋の前を通過する。

突然、ミンチンのセキが聞こえる。

ロッテイ、立ちすくむ。

ロッテイ「（シーザーに）シイ！……」

やがて静まる。

と口止めしながら、通りすぎ屋根裏部屋への階段口へくる。

23 同・屋根裏への階段口（深夜）

ロッテイきて、見上げる。

暗く、細い階段がどこまでもつづいているように見える。

ロッテイ、こわごわ、その階段を上り始める。

24 同・屋根裏部屋（深夜）

ネズミの消えた穴に向かって、小さく口笛を吹いてい

るセーラ。

セーラ「いらっしゃい、ネズミさん。私は何もしないわ、ただお話がしたいだけなのよ……」

だが、妙になりをしずめているネズミ。

セーラ、しばらくまつが、あきらめてベッドへもどる。

セーラ「せっかくお友だちになろうと思ったのに……」

燃えつきそうなローソク吹き消そうとして、?……となる。

外で、何か気配がするのである。

25

同・外の廊下（深夜）

ようやく登ってきたロッテイが、泣きそうになっている。

廊下は左右に別れ、しかもあちこちにドアがある。

うろうろしてしまうロッテイ。

ロッテイ「セーラママ……セーラママはどこにいるの……」

泣きべそで、立ちつくした時、背後のドアあいて、セーラの仰天した声。

「ロッテイじゃないの?!」

ロッテイ「セーラママ!!」

夢中になってセーラにしがみつく。

セーラ「(呆然)ロッテイ、こんなことして、こんなことして……」

ロッテイ「逢いたかったの、セーラママに逢いたかったの」

泣きじゃくるロッテイを、思わず抱きしめてしまうセーラ。

ベッキーも気がついたらしく、奥のドアから出てくる。

ベッキー「まア……どうしたんです?!」

セーラ「ひとりでひとりできたのよ、ロッテイったら……」

ベッキー「(胸がつまるが)でも、もしこのことが院長先生に知れ

たら……私、送ります。みんなに見つからないうちに、
私がお送りします」
ロッテイ「イヤ！　今夜はここにねるの！」
必死にセーラにすがりつく。
セーラ「わかったわ、わかったからもう泣かないで、騒ぐと下のミンチン先生にわかってしまうわ」
ロッテイ、とたんにピタッと泣きやむ。
顔見合せるセーラとベッキー。
ベッキー「お嬢さま……」
セーラ「（覚悟をきめる、きっぱりと）今夜は、私のところへ泊めるわ」
ベッキー「でも、もし、そんなことが他の人に知れたら……」
セーラ「その時は、私、どんな罰でも受けるつもりよ、たとえ、学校を追いだされることになろうとも……」
りんと、ロッテイをかばう。

ベッキー「（打たれて）お嬢さま……」

26

同・屋根裏部屋（深夜）

ベッドに並んで腰かけて、ロッテイのもってきたビスケットを食べるセーラとロッテイ。

ロッテイ「おいしい？」

セーラ「ええ、とっても」

ロッテイ「良かった、私のお土産気に入ってくれて……」

無邪気に喜こぶロッテイに、セーラ、涙がこぼれそうになる。

セーラ「（思いをふり切るように）それより、どう？　このお部屋気に入って？」

ロッテイ「うん……」

と、困ったように部屋の中を見回す。

ロッテイの目にも、暗く薄ぎたないことはわかる。

セーラ「（突然）ロッテイ、目を閉じて」

ロッテイ「え？」

セーラ「こうよ」

ロッテイ、あわてて真似る。

静かに目を閉じてみせる。

ロッテイ「閉じた」

セーラ「（静かに話しだす）このお部屋の壁は、雪のようにまっ白なの。そして壁には、ステキな絵がかかってるわ。テーブルにはレースのテーブルクロスがかかっていて、お花の一杯入った花瓶……そうね、それから向こうの壁には、本の一杯つまった書棚があるの。そして窓には……」

ロッテイ「（思わず自分の思いの中で叫ぶ）きれいなお花の一杯ついたカーテン！」

セーラ「（嬉しくなって）そうよ、そうよ、そして、ベッドにも、

ロッテイ「うん、ふかふかの……」
ふかふかの羽根ぶとんを揃えなくちゃね……」
言いかけて、けげんになる。
ガサゴソ……と音がする。
ロッテイ、そっと目をあけて見回したとたん、
ロッテイ「あ……」
と、セーラにしがみつく。
セーラ「ロッテイ？」
ロッテイ「（恐ろしそうに）ネ、ネズミ！」
セーラ見ると、例のネズミが、すぐそばまできている。
以前とちょっと違って、鼻をピクピクさせている。
セーラ、あっと気がつく。
セーラ「（思わずニッコリして）そうだったの、あなたは、おなか
がすいてたの？」
ロッテイ「（きょとんと）セーラママ……」

そのロッテイをシッ！と押えるセーラ。

セーラ「（そっと）大丈夫、お目あてはこれよ、においがわかったのよ」

ロッテイのもってきたビスケットをつまんで、そっと、ネズミの近くに置いてやる。

セーラ「（ネズミに）いらっしゃい、私たちは何もしないわ。だから安心していらっしゃい」

ロッテイ「言葉がわかるの？」

セーラ「さあ……でも、こっちがお友達と思えば、きっと向こうだってそう思ってくれると思うのよ」

ロッテイ「ほんとう？」

それでもこわごわ、セーラのかげからのぞく。

ネズミ、しばらく様子を伺っているが、ついに決心したらしく、ソロソロビスケットのかけらに近ずき、一片をヒョイと口にくわえると、さっと中へ逃げていく。

セーラ「（がっかり）お友だちになろうと思ったのに……やっぱり
気持は通じなかったのかしら……」
ロッテイ「（何となくがっかりして）……」
セーラを見る。
そのセーラ、あ……と小さく叫んで目を輝かす。
さっきのネズミが、又現われたのだ。
そして、その後には妻らしいネズミと子ネズミらしい
のを連れて。
用心深くではあるが、ソロソロと一同、残ったビスケ
ットのかけらの方へ近寄ってくる。
ロッテイ「（思わず）セーラママ！」
セーラ「（胸はずませて）ええ、ええ……私たちのこと信用してく
れたのね、それで家族を呼びに行ったのね」
こみ上げそうになりながら、ネズミたちを見つめる。
ロッテイ「ね、このネズミさんたちに名前をつけてあげない？」

セーラ「（も、思わず）そうね」
　考える。
　やがて、
セーラ「メルチセデック！」
ロッテイ「メル……メル……」
セーラ「メルチセデック。いつかパパに買ってもらった本の中にあった名前なの、それが良いわ」
　セーラ、自分の思いつきに夢中になる。
セーラ「（ネズミに）今日からそう呼ぶことにするわ、メルチセデック。これからもよろしくね」
ロッテイ「（も、真似て）よろしくね」
　まだ用心深く、それでも、ビスケットのかけらを黙々と食べつづけるネズミの一家。

27　夜が次第に明けてくる

小鳥たちのさえずりが始まる。

28 ミンチン女学院・屋根裏部屋（早朝）

小鳥たちのさえずりが、にぎやかである。
その声に、ふと目をさますロッテイ。
見なれない天井、薄汚れた壁、そしてこわれかけた家具――。
そこがセーラの部屋であることに、ハッと気がつく。

ロッテイ「（思わず）セーラママ?!」

とび起きる。
すでに起きて、天窓から外を見ていたセーラ気ずき、

セーラ「お早う、ロッテイ」

ロッテイ、勢い良く起きてくる。

ロッテイ「何してるの？」

セーラ「ロンドンの町を見てたのよ、それに小鳥たち……」
ロッテイ「町や小鳥たちが見えるの?!」
セーラ、頷いて、ロッテイをそばの台の上にのせてやる。
ロッテイの眼前に一面にひろがるロンドンの遠景——。
ロッテイ「うわァ、ステキ……」
目を輝かすロッテイに、セーラ、ビスケットの残りくずをもってきて、分けてやる。
セーラ「小鳥さんたちに、朝のお食事をあげましょう」
ロッテイ「え?」
セーラ「ほら、待ち遠しそうにこっちを見てるわ」
ロッテイ、ワクワクする。
セーラにならって、ビスケットのくずをそっと置きながら、
ロッテイ「くるかしら、くるかしら……」

息をつめる。

セーラ「（小鳥に）おいで……ほら、おいしいビスケットよ」

小鳥たち最初は用心しているが、やがて少しずつ近寄ってくる。

二人、互いに息をのんで見つめる。

最初の一羽が、勇かんにエサをついばむ。

やがて、危害がないとわかると、一羽又一羽と、そろそろ近寄ってくる。

ロッテイ「（小さく）やったァ！」

セーラ「（微笑で）……」

29 同・部屋の外（早朝）

ロッテイをいそがせて出てくるセーラ。

30

同・三階・ミンチンの部屋の前（早朝）

うさんくさく見るシーザーに、シーと口どめしながら、
ロッテイの手をひいて通りすぎるセーラ。

31

同・ロッテイの部屋の前（早朝）

ロッテイをつれてくるセーラ。
セーラ「（小さく）おやすみなさい……それからありがとう」
ロッテイ「（けげんに見るが）おやすみ」
と、中へ入っていく。
ドアの間から無事ロッテイがベッドにもぐりこむのを
見て、安心したようにドアをしめるセーラ。

32

同・屋根裏部屋（早朝）

仕事に出かける準備をしているセーラ。

セーラのＭ「可愛いいロッテイのためにも、がんばらなくては……

ロッテイの訪問で勇気ずけられたのは、本当は私の方

だったのかも知れません……」

そのセーラの希望の表情で

つづく